

福瀬遺跡Ⅱ

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う

発掘調査報告書

1990.3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

福瀬遺跡Ⅱ

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う
発掘調査報告書

1990. 3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序 文

和泉市福瀬町に所在する福瀬遺跡は、昭和48年の大阪文化財センターによる分布調査で発見されたものですが、関西新空港建設関連のアクセスとして重要な大阪外環状線の建設工事に先だって発掘調査を実施するところとなりました。

調査は大阪府教育委員会の指導のもと、昭和62年から63年にかけて（財）大阪府埋蔵文化財協会が道路予定地約12000m²にわたって実施してきたものです。

本書は、前回の調査時に未調査となっていた部分の調査報告であり、これによって福瀬遺跡のはば全容が明かとなり、ひとまず調査は一段落いたしました。

福瀬遺跡は、和泉市の山間部に位置しておりますが、縄文～古墳時代、奈良～江戸時代にまたがる複合遺跡であることが明かとなり、特に平安時代から中世にかけての濃密な遺構の分布が、当地の開発の歴史を物語っています。さらに、前回の調査で検出された「堀」と「土塁」をめぐらせた「居館」は、横山谷に番居していた池辺氏、父鬼氏、横山氏の在地豪族の内、横山氏（後の岡氏）の居館であったと推定されており、当地の開発の歴史や在地集団の動向を知るうえで貴重な成果が明かとなってきたと言えます。

本調査を実施するにあたっては、大阪府教育委員会、大阪府土木部鳳土木事務所、地元和泉市教育委員会、地元自治会など関係各位の多大な御協力と御理解を得、調査の円滑な実施ができましたことを深く感謝いたします。

今後とも当協会の事業に対して、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成2年3月

財團法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 仁賀奈祐吉

例　　言

1. 本書は主要地方道枚方、富田林、泉佐野線（一般国道170号—通称大阪外環状線）建設に先立つ、和泉市福瀬町に所在する福瀬遺跡の第4次発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府鳳土木事務所の委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、（財）大阪府埋蔵文化協会が実施した。
3. 調査には当協会調査課第1班（班長森村健一）があたり、技師・岸本道昭が実務を担当した。現地調査は1989年12月に実施し、整理および報告書作成は1990年1月に完了した。
4. 調査に当たっては大阪府鳳土木事務所、地元自治会など関係各機関の協力を受けた。
5. 調査方法は、当協会発掘調査規程に従って地区割りを設定し、方位は座標北、標高はT.P.で表示した。平面図は航空測量を実施しており、図中の座標値の単位はkmである。また、土壤色は小川正忠・竹原秀男編著「新版標準土色帖」（8版）1988年を使用して命名した。
6. 本書の写真は遺構を調査担当者、遺物は小倉 勝があたった。
7. 遺物は通し番号をうえ、図・写真に共通する。
8. 本調査は、本文中にも触れるように第1～3次調査の最後に残った小範囲の調査であった。先の調査結果については、当協会調査報告書 第39輯「福瀬遺跡」1989年、に詳細が述べ尽くされている。本書ではそれらについては割愛し、前書を参照されたい。また、本書第1～3図は前書所載のものに作成者の許可を得た上、一部変更を加えて再掲載したものである。
9. 本書の執筆・編集は岸本が行なった。

目 次

序文

例言

第Ⅰ章 はじめに.....	1
第Ⅱ章 調査の結果.....	5
第1節 總序.....	5
第2節 遺構と遺物.....	6
第Ⅲ章 まとめ.....	9

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と調査区地区割.....	2
第2図 調査区位置図.....	3
第3図 既往の調査区との位置関係.....	4
第4図 調査区南壁（一部）土層断面図.....	5
第5図 調査区平面図.....	6
第6図 70-OO平面・断面図.....	7
第7図 76-OX断面図.....	7
第8図 出土遺物実測図.....	8

図 版 目 次

図版 1 調査区垂直写真
図版 2 調査区全景
図版 3 土層と遺構
図版 4 遺構
図版 5 遺物

第Ⅰ章 はじめに

福瀬遺跡の発掘調査は1986年度の試掘調査に始まり、1987年から1988年にかけて3次の発掘調査が行なわれ、道路予定地内とは言え多くの考古学的事実が判明している。それらについては、既刊の当協会の報告書に詳しく述べ、地理的・歴史的環境および調査全般の成果についてもそちらに譲ることとする。また、調査の方法や基本的な遺構・遺物の状況も既往の成果を出るものではなく、本書は事実報告にとどめたので既刊報告書との参照を重ねてお願ひしておきたい。4次にわたる調査は、以下のとおりである。

1次調査	1987年7月～1988年1月	「福瀬遺跡」協会調査報告書 第39輯
2次調査	1987年11月～1988年3月	
3次調査	1988年5月～1988年11月	
4次調査	1989年12月	「福瀬遺跡II」本報告書

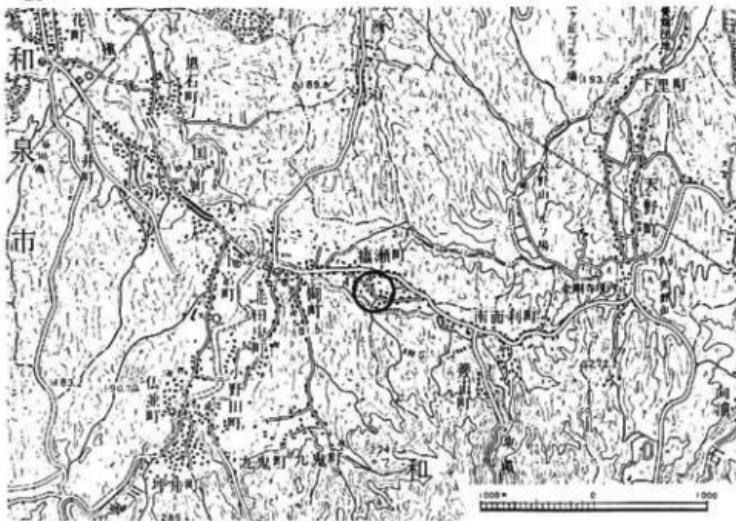
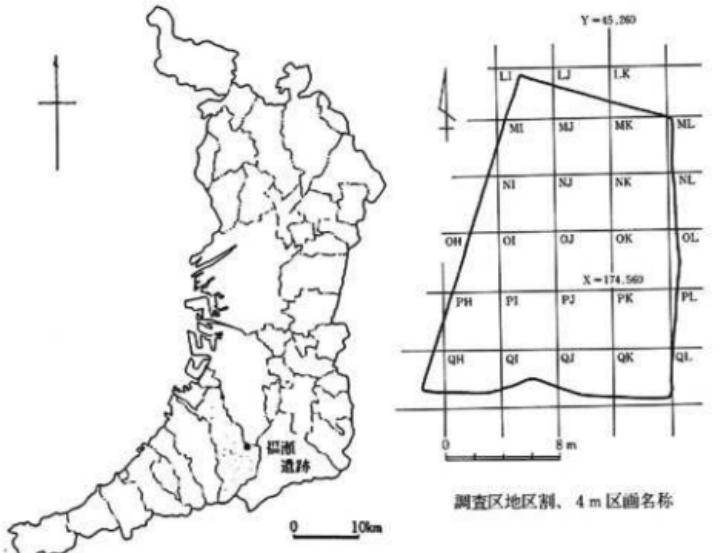
本調査区は、先立つ調査の過程で地元調整の不備から、約300m²余りが未調整区となっていたものであり、G地区とH地区の間に残っていた台形状の調査区である。

調査にあたっては、遺構面の深さや様子などがほぼ判明していたので、まず調査区の範囲を確定することから始めた。コンクリートやアスファルトによる地表面の変更があったが、国土座標値からの復原と試し掘りをもとに位置関係を求めた結果、前回調査区のG、H両地区の端辺を確認し、前回調査区の側溝に本調査の側溝を重ねるようにして未調査部分が残らないように努めた。

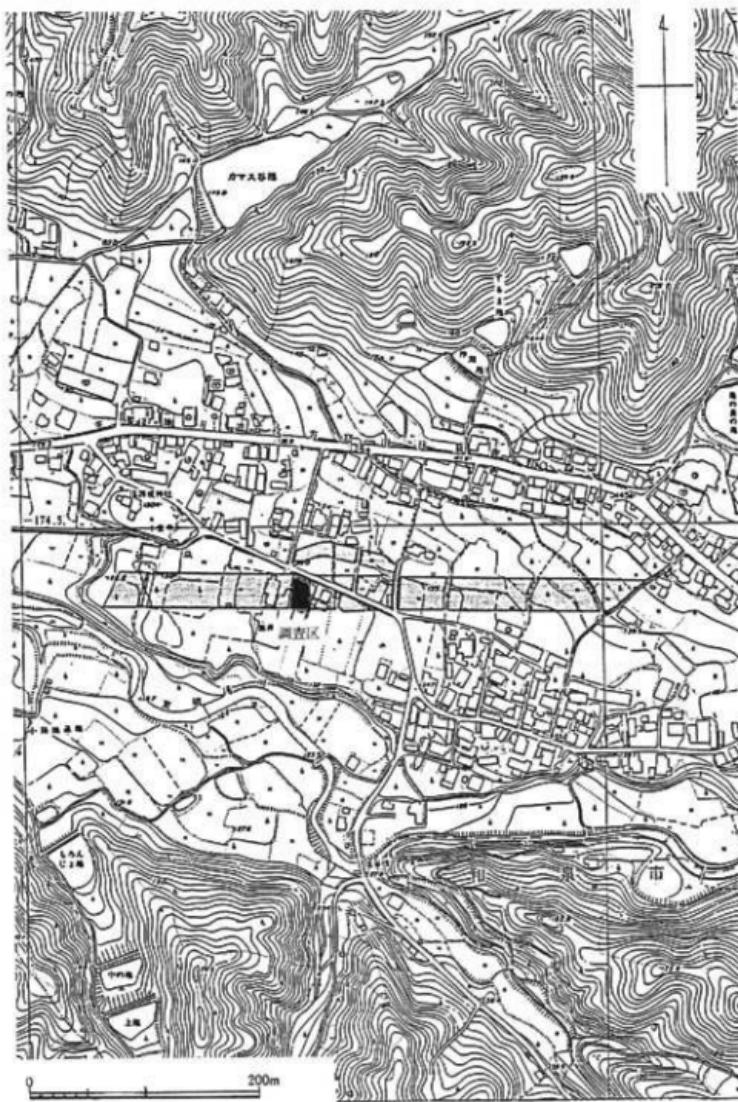
なお、調査区域には排水管、コンクリートの建物基礎や性格不明な擾乱坑が散在し、まだ使用中の電柱が撤去できないまま残っている、などの状況であった。

遺跡は、調査区西隣のH地区では鎌倉時代の溝と「居館」が検出されているが、東端付近は若干の擾乱を除いてほとんど遺構が希薄な区域である。東隣のG地区では、畑の耕溝や不整形な落ち込みと土坑が多く認められるが、性格の明瞭な遺構が存在していない。したがって本調査区において、重要遺構の検出は当初から予想されていなかった。

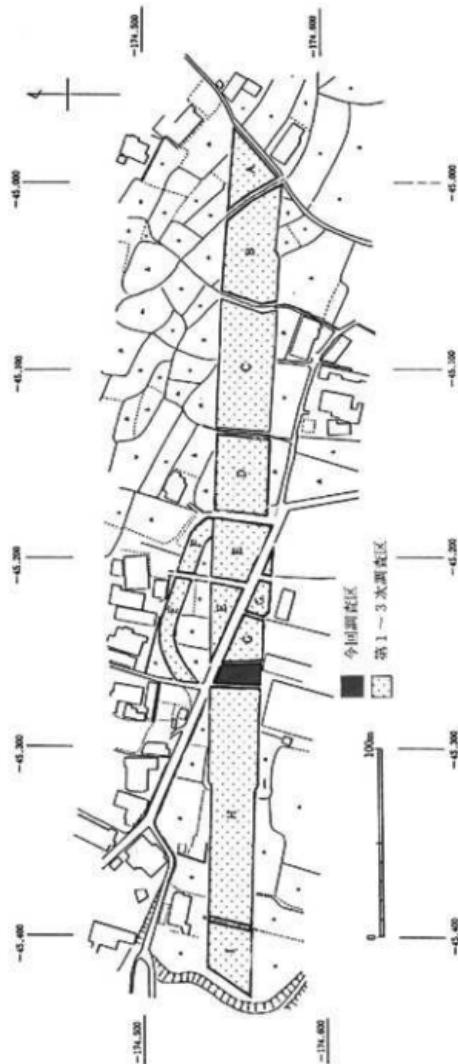
調査の結果は予想どおりで、東西と南北方向の畑の耕溝遺構が數十と、畑に関係すると思われる溝状のくぼみ、土坑が一基、南北方向に延びる浅い落ち込みが検出されたのみであった。遺物は総計500点余りが検出されたが、ほとんどは実測不可能な小片である。



第1図 遺跡の位置と調査区地区割



第2図 調査区位置図



第3図 既住の調査区との位置関係

第II章 調査の結果

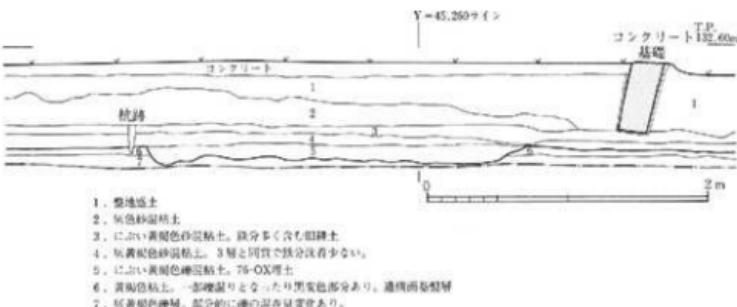
第1節 層序 (第4図、図版3)

層序は第4図に示すように、単純である。調査区付近の地表はT.P.132.30mであって、遺構面は地表下50~60cmに存在する。本調査区では地表にコンクリートやアスファルトが覆っていたが、直下に施工時の整地盛り土が存在する。

T.P.131.90m付近からは約20cmの厚さで旧耕土層がみられ、3層がにぶい黄褐色砂混粘土層、灰黃褐色砂混粘土層(4層)が全体に堆積している。3層は鉄分の沈着が著しく色調が変わっているが、本来3・4層はほぼ同質の層であろうと思われる。3・4層からは土師器、須恵器、瓦器などの土器の小破片が出土した。

T.P.131.70m付近に見られる6層の黄褐色粘土層は、本調査区での遺構面基盤層に当たり。この層の上面で各時代の遺構が検出され、以下は無遺物層のようである。なおこの層は福瀬遺跡全体に及ぶわけではなく、当然全調査範囲の各地域では異なる層が遺構面と認識されている。小範囲の本調査区内においても、遺構面は砂礫の含み具合が多くなったりして疊層様に変化する部分があり、また北半では二酸化マンガンの沈着が激しく、黒褐色に変色するなど変化に富んでいた。

6層下では、灰黃褐色の疊層が普遍的に認められ、この付近の所謂地山を構成するものと考えられる。

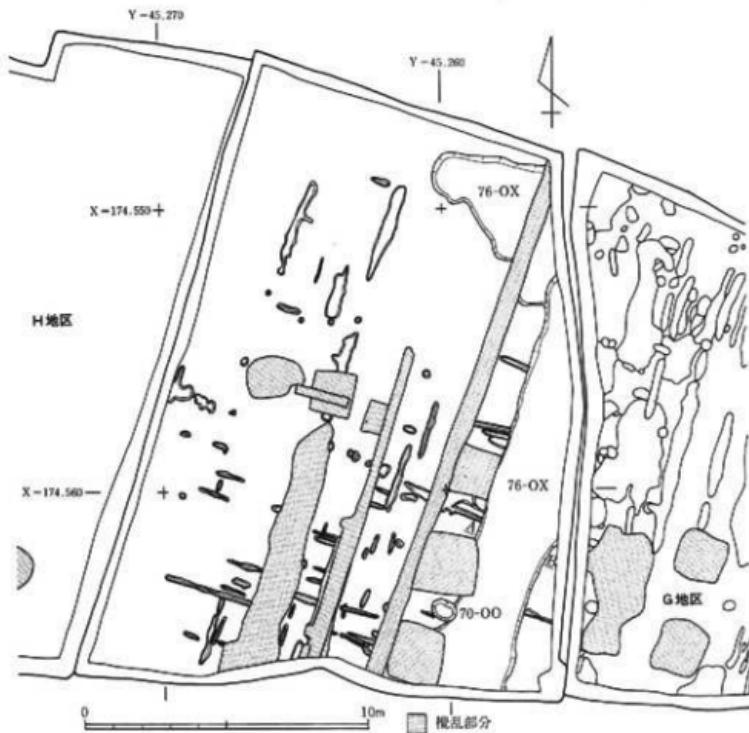


第4図 調査区南壁(一部) 土層断面図

第2節 遺構と遺物（第5～8図、図版3～5）

本調査区で検出された遺構は、擾乱を除くすべての総量で約80である。大半が畑の遺構であるいわゆる鋤溝である。鋤溝にはほぼ南北方向のものと東西方向のものが存在し、中にはやや幅が広くなるものもあるが、いずれも5cm程度の深さしか残っていない。ただ埋土が灰褐色のものと褐灰色の二者があり、二時期にわたる耕作の遺構であることがわかるが、方向や大きさと埋土の相関性はなく、具体的な耕作の復原はできない。

遺構として捉えられるものは、次に述べる土坑と落ち込みであり、他に小穴がいくつか見られるが、極めて浅い窪み状のもので建物を構成するようなことはない。



第5図 調査区平面図

70-O O (第6図、図版4)

長径90cm、短径70cmのやや長円形を呈する土坑であつて、深さ25cmを測る。東肩が76-O Xを切っているので新旧関係がわかる。

埋土は褐灰色砂混粘土層単層であり、上面の窪みに溜まるように薄く灰黄褐色粘土層が見られた。埋土の様子からすると機能を終えて一気に埋められたようであるが、性格は不明である。

遺物は、瓦器と土師器の細片が数点出土したのみであったが14世紀代のものであろう。

76-O X (第7図、図版4)

調査区の東端に沿うように見られた広範開かつ浅い落ち込みである。

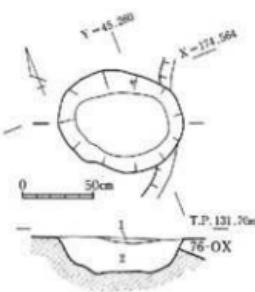
断面図作成(A-B、第5図)付近では、平均2.5mほどの幅を持ち、深さは15cm程のものである。形状は溝状であるが、北へ延びた後や西側へ不整形に広がる。ただ、広がるところで若干の段を持つので、本来は溝状の窪みと不整形の落ち込みが重なったものと考えられる。調査時にはこの状況が良く把握できなかったので、一連のものとして呼称し、遺物も分離していない。時期差の有無も不明である。

埋土は上から、にぶい黄褐色疊混粘土、灰黄褐色砂混粘土、さらに黄褐色の粘土ブロックが混入するものであり、調査区南壁付近のようににぶい黄褐色疊混粘土層としか見えないところもある。

この落ち込みは、先の70-O Oに切られており、検出時にも上面にいくつか鉛溝が見られたので、最も古い遺構であると言える。

遺物はかなりの量が出土したが、ほとんど小破片で目立ったものではなく、遺構の性格も推定する材料を欠いている。水が流れたような痕跡はない。

前回調査区のG地区検出の遺構との関係も明瞭でなく、もともと浅い搅乱が多く、検出方法によっては同じ条件で見出しにくいものなのである。



1. 褐灰色砂混粘土層
2. 灰黄褐色粘土層

第6図 70-O O平面・断面図



第7図 76-O X断面図

76-OX出土遺物（第8図、図版5）

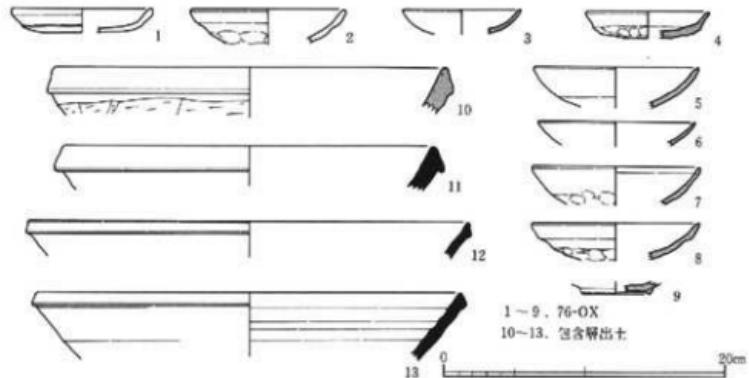
76-OXからは土師器・瓦器・須恵器などの遺物が出土したが、ほとんどが細片で図示できるものは少ない。1・2は土師器で小皿と碗であるが、2は瓦器の焼成不良品かも知れない。4を除く3～9は瓦器碗であるが、いずれも口径が小さく、焼成不良で土師器様に見えるものが多い。体部下半のオサエが観察できないものもある。4は瓦器小皿であって焼成もよい。9の底部などもあり、高台が退化しきった時期ではない。14世紀中頃を中心とした時期が与えられる。

包含層出土遺物（第8図、図版5）

包含層から多くの土器破片が出土し、縄文時代と思われるサヌカイト剝片から近世の陶磁器までが含まれるが、大半は中世の遺物であった。土釜や甕は少なく、瓦器碗・土師器碗片を中心に、瓦質の鉢や須恵質鉢がみられた。

実測に耐えうるものを選ぶと鉢ばかりになったが、11～13のうち10が瓦質の他は須恵質である。内面はいずれも小片のため観察できなかったが、10の外面はケズリである。口縁部は、11のようにシャープな作りで端面を垂下せるものや、さほど端部を意識させない作りのものが混在する。須恵質のものはいわゆる東播系の製品であるが、瓦質製品が混じり始める14世紀後半代の遺物である。

当調査区では良好な遺構が見られなかったが、以上のように14世紀代の遺物が中心であって、先の報告による「V期」と設定された本遺跡の時期に関連する地区である。



第8図 出土遺物実測図

第III章　まとめ

福瀬遺跡の発掘調査は、本報告をもってひとまず終了した。本文でも触れたように今回
の第4次調査で、既往の成果に大きく付け加えるべき新たな遺跡内容の検討材料は見出
えなかった。したがって、先の報告「福瀬遺跡」で述べられている諸問題に若干の私見を
加えてまとめとしたい。

福瀬遺跡における開発の画期は鎌倉時代前期にあるとされ、開発の重点は荒廃耕地の再
開発や山間の地に新たに求められ、それが中世開発史の研究成果と一致している。ところ
で、このような地の開発の歴史を考えるうえで、開発という行為が具体的には何を指して
いるかという点である。先の報告では基本的に、斜面の水田開発・灌漑用水などについて
検討が加えられており、「水田」開発ということが前提となった考察がなされている。

福瀬遺跡のような山間部で、なおかつ地形変更の困難な地では、最初の開発の画期につ
いて「水田」を想定するほかに、畠地を付け加えるべきだと思われる。もちろん水田耕作
が行なわれていたことは否定すべきではないが、中世初期の畠作農耕の発展という事実に
ついても考慮する必要があるということである。特に福瀬遺跡のいわゆる鉢溝の残存状態
を見てみると、畠の土地利用と考えても充分理解できるところである。一般に鉢溝と呼ば
れる遺構がどのような事情で形成され、帰属時期は周囲の遺構との関連においてどう位置
づけられるか、が今後の調査で注意を喚起されるところである。

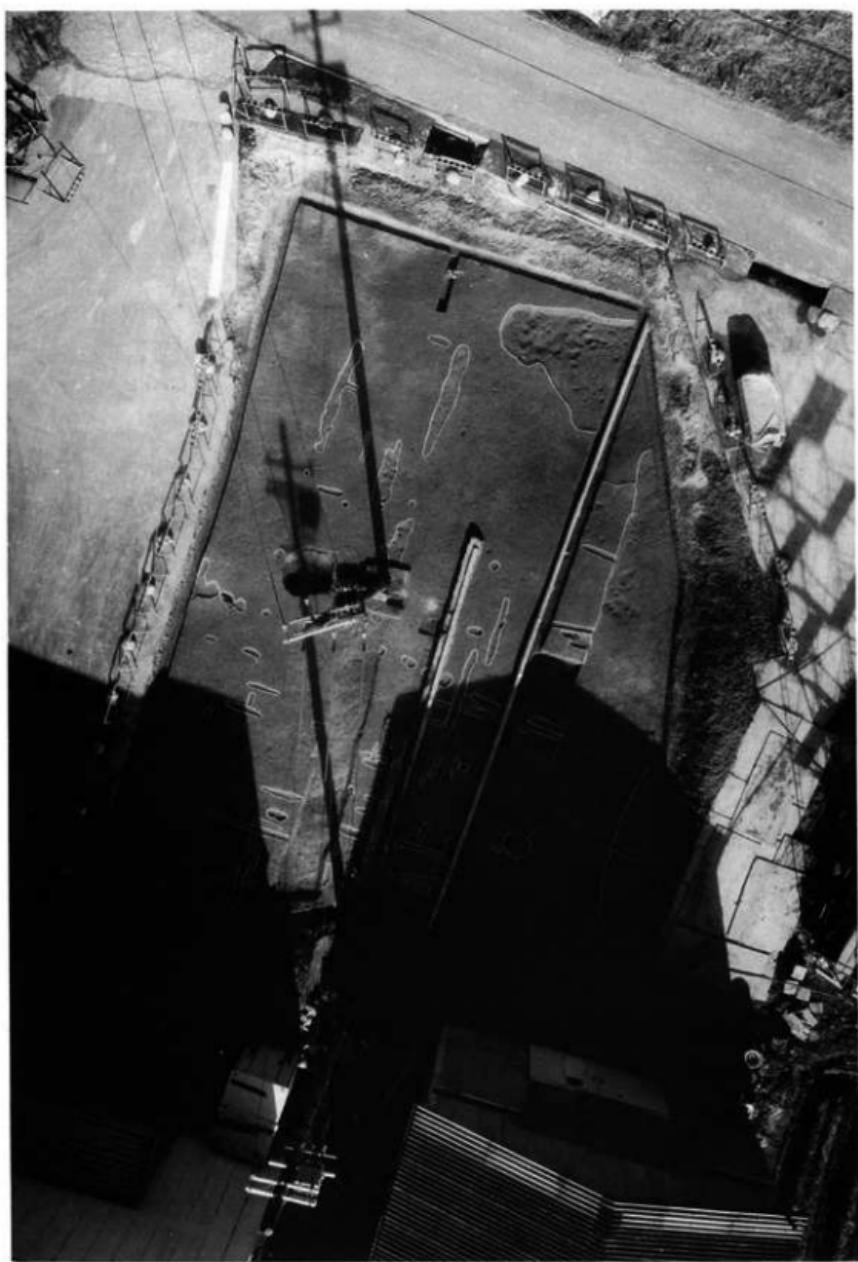
中世における農業史が稻作と田地の研究に圧迫されがちな状況にあって、実のところは
畠地による各種農作物が中世農民の生産基盤の重要な比重を占めていたことは想像に難く
ない。この点は、発掘調査に伴う花粉分析などの成果が援用されるべきであるが、分析資
料採取の方法など今後の問題意識的な調査課題となろう。

また、「居館」とされた堀立柱建物と鉢溝の畠地がどの程度並存させうるかが問題となる
が、先の調査結果では「居館」周辺には鉢溝が認められない事実があって、建物と鉢溝
遺構が共存するなら、周辺は建物の主の農場となっていた可能性がある。領主-農民の関
係も考古学的な調査によって、次第に実態が究明されることが期待されよう。

(参考文献) 黒田日出男『日本中世開発史の研究』歴史科学叢書 校倉書房 1984年。

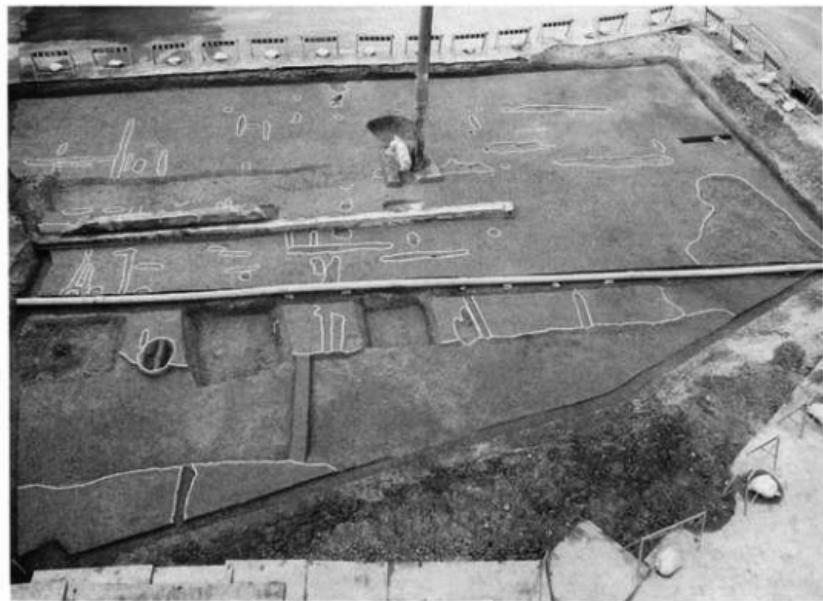
なお、黒田日出男氏によれば、畠と畠は使い分ける必要があるという。

図 版

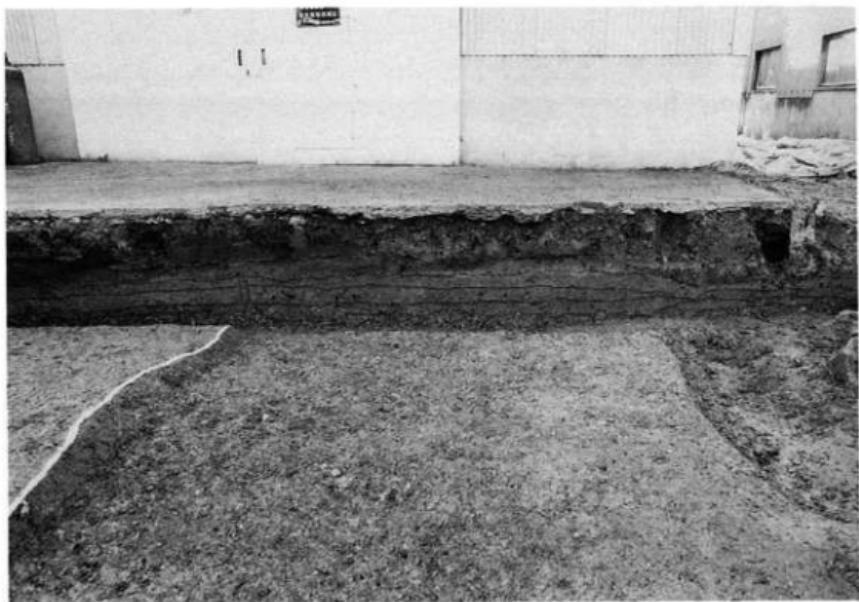




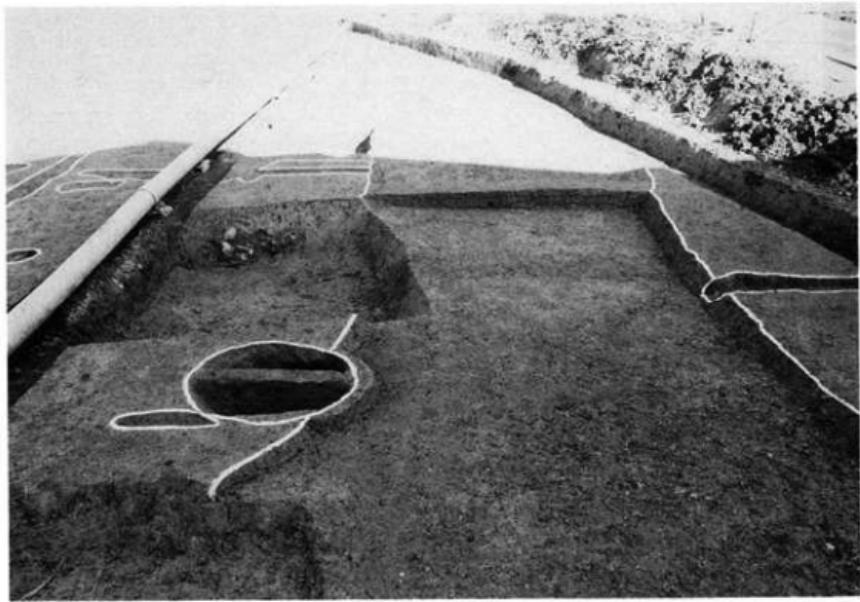
(西方上空から)



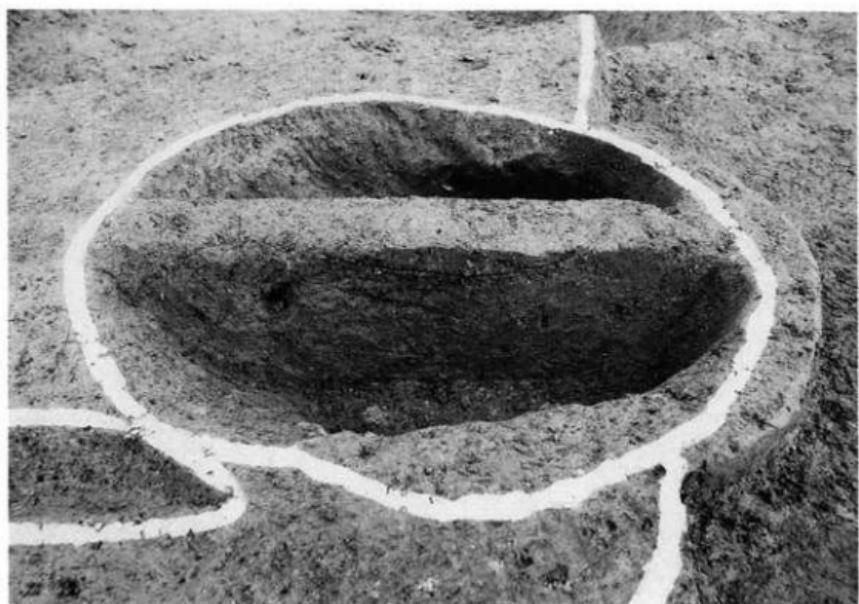
(東方から)



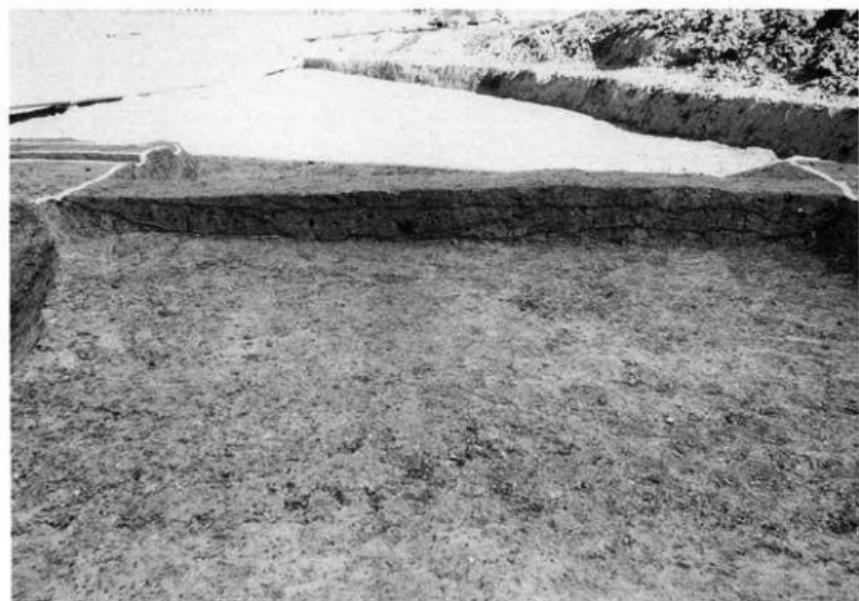
調査区南壁断面（部分）



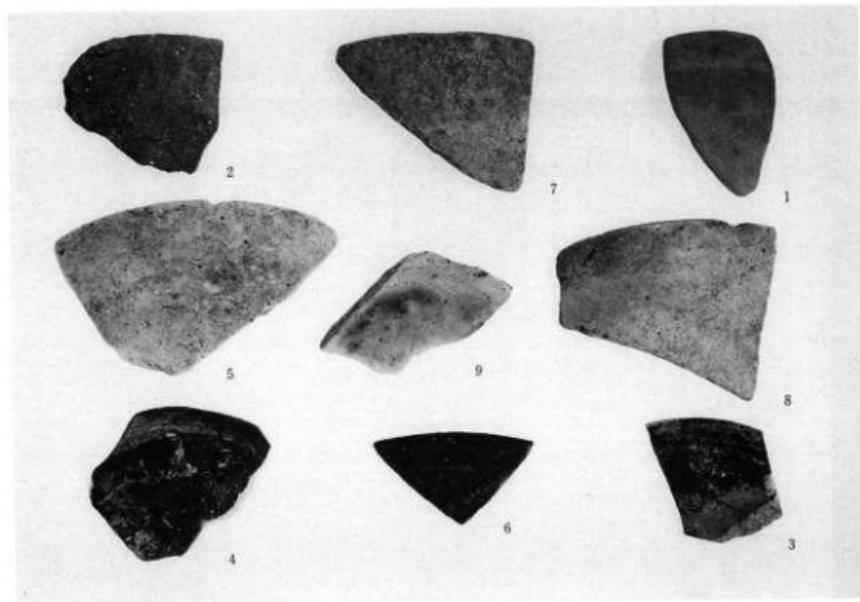
70-OOと76-OX付近（南から）



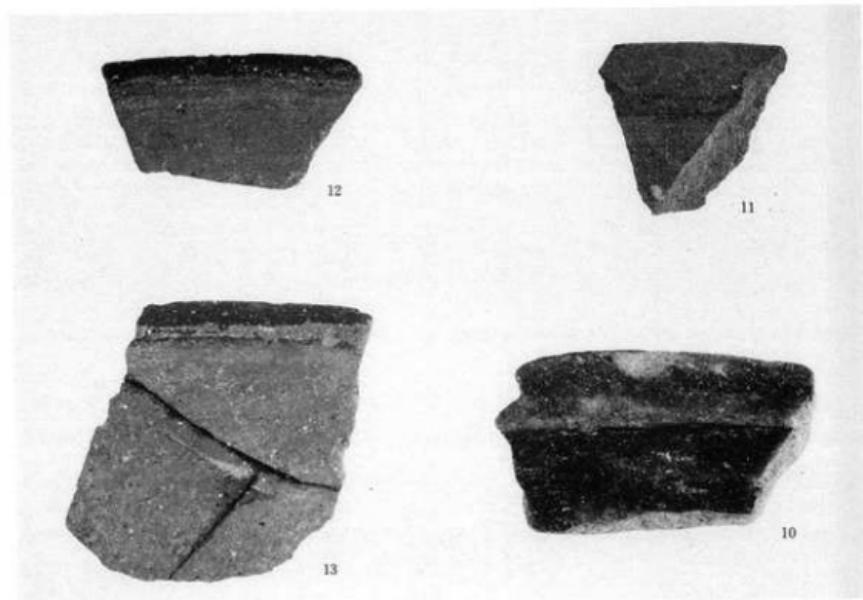
70-OO (南から)



76-OX断面 (南から)



76—OX出土遺物



包含層出土遺物

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第49輯

福瀬遺跡 II

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う
発掘調査報告書

1990年3月31日

編集・発行 財團法人 大阪府埋蔵文化財協会
大阪市中央区谷町2丁目2-20大手前ウサミビル

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所